



明治期の裁縫教授書類における教授媒体としての「 図」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004690

明治期の裁縫教授書類における教授媒体としての「図」

田 中 陽 子

北海道教育大学岩見沢校家庭科研究室

1 はじめに

明治期の裁縫科では主に裁縫技能の習得と婦徳の涵養が目指されたのであるが、技能習得に関する教授・学習過程において、教授書類の果たした役割は大きいと考えられる。それは教授資料および学習資料として教師や生徒の理解を助け、授業の展開に役立ったと考えられるからである。明治期の裁縫教授は、江戸時代までのお針屋教授を引き継ぐ形ですすめられた面が大きいと考えられるが、口承による教授から教科書や教授書を用いての教授に移行した際、「図」を活用することで、伝達すべき内容が目に見えるレベルで提示されることになり、教授および学習がわかりやすく、より合理的に行われたと考えられる。「説明を明瞭にし、観念を確実ならしむるは図を描き、或は実物標本を示すを以て第一とする」¹⁾考え方によれば、どのような「図」をどのように用いるかは、教授上重要な要素であったといえよう。

本稿では裁縫教授書類における「図」が、明治期の教授法における新しさの徴としてどのような意味をもち、役割を果たしたのかという視点で考察したい。

2 方法

裁縫科が制度上、小学校の一教科として誕生したのは明治12（1879）年であるが、「図」を検討する際に参考にした資料は、明治16（1883）年から明治末期までに発行された小学校の裁縫教科書および教授書である。

まず、これらの資料に掲載された「図」が教授媒体として用いられた目的について検討する。続いて「図」がどのように描かれているかについて、その表現形態や表現技巧等について検討する。そして、「図」が教育的に機能するための要件について考察する。

3 教授媒体として「図」が用いられた目的

「図」が用いられた目的を明らかにするために、教科書や教授書において用いられている「図」を、授業や作業の様子を写実的に描いた挿画、言説を補う説明図、図案の3つのタイプに分類して考察する。参考にした「図」は、図表1に示した[1]から[29]である。

挿画には次の3種が見られた。その一つは、一枚の図に複数の状況が合理的に組み込まれている種類の図である。[1]²⁾は、明治16（1883）年に発行された『小学校裁縫図解』の第一巻に掲載されているものである。師匠と思われる女性の髪形や、第五巻では引裾の立ち姿で描かれていることから江戸時代のお針屋での裁縫教授の一場面を描いたものと思われる。その師匠を左右から囲むようにして座る女兒たちは、裁ち方

から仕上げまで様々な種類の針仕事を行っている。学校教育の場に用いられようとする教授書において、このような学習進度の不揃いな光景図が掲載された理由であるが、それは第一巻には、入門書として裁縫の全体的な内容を紹介するために、作業工程を網羅した図を掲載する必要があったからだと考えられる。今日の教科書に用いられている写真は現実を、リアリティーのある対象として正確に映し出すものである。しかしながら、この種の挿画は描く際、その意図をより明瞭にすることを目的に内容进行操作し、固有の意味を生成することができる。二つめは、その当時においてまだ一般的ではなかったと思われるモノや状況を広く普及させることを目的に描かれた種類の図である。〔2〕^①は「裁縫科教授の図」である。これは一斉教授を模範的な授業形態として伝えることを目的にしていることが読みとれる。〔3〕^②の机は、裁断の便宜を考慮して左右の側面が開閉でき、必要のないときは下段のように閉じればよい。しかしながら、小学校では「裁ち方」より「縫い方」が重視されていたことも影響して、普及するまでには至らなかったと思われる。三つめは、ありのままの光景や様子を客観的な正確さをもった図像として描いている種類の図で、〔4〕^③・〔5〕^④がその例である。この種のものとして『小学裁縫書』には、「縫い方の図」^⑤・「裁ち方の図」^⑥・「せんたくの図」^⑦・「板はりさをほしの図」^⑧・「しいしはりの図」^⑨がある。いずれも作業の方法や留意点などの具体的な目的は読み取れないが、教授や仕事のありさまを描いたものである。

一方、説明図は教授・学習内容との整合性を保証するという意味から、理解すべき対象である形や技術を正確に映し出すことが必要とされよう。また言説のみでは複雑な過程を対象化し分節することによって、教授・学習内容の要素を顕在化させることができたと考えられる。言説を補助することが目的であった「図」は、表象された内容を理解するための媒体であったといえる。この種の「図」には、手順や方法を理解させることを目的とした図と、形や名称を理解させることを目的とした図の大きく2種類が見られた。

図案は、製作の素材として必要とされるものであり、教授・学習上、何らかの意味を伝えるための媒体として用いられる「図」ではなく、直接的に用いられる種類の図である。その例として、雑巾の刺し方・背紋・飾り縫いの図があげられる。

以上から、教授書類において「図」が用いられた背景には次のような目的があったのではないかと考えた。挿画には授業や作業の光景を紹介するという目的があり、説明図には言説を補助するという目的があった。また図案は素材として、教授および学習に直接的に用いられるものであった。

4 表現形態

「図」がその目的において有効に機能したか否かは、「図」の描かれ方、つまり表現技巧の如何に左右されると考えられる。そこで、教授書類に用いられた図がどのように描かれているのかを、目的別に見ていく。

1) 授業や作業の光景を紹介することを目的にした「挿画」

①意図した目的を伝えるために状況が設定されて描かれた「図」

〔1〕の目的は先に述べたように、針仕事の内容を知らしめることにあった。互いに向き合って裁縫をしている女兒の中には、針に糸を通してあるもの、糸巻あるいはものさしを手を持っているもの、布端に並み縫いをしているものが見られる。膝元に注目すれば、布きれが畳んで置かれている女兒がいる。それはなく、すでにひと続きになった布を縫っている女兒がいる。円の内側には、かなり大きめの裁ち板が二枚置かれており、一方の裁ち板の前に座っている女兒は、定規と裁ち包丁で今まさに布を裁とうとしているところである。もう一枚の裁ち板を使っていた女兒は、裁ち終えた布を師匠に差し出している。円の外には、出来上がった着物に火熨斗をあてている女兒がいる。裁縫の過程がほぼ網羅されている。

②普及させることを目的にモノや状況を客体化して描いた「図」

[2] は、板書を用いた一斉教授の形態が描かれている。袴の図と文字が整然と板書された黒板の前で教師が説明をしている。おそらく出来上がり図によって、名称や縫い方の順序などを確認しているところであろうが、教授技術としての「図」の活用方法を提示しているものでもある。

③ありのままの光景や様子を表示した「図」

[4] は女兒たちが「裁ち方」と「袖の部分縫い」をしている様子を、[5] では仕上げの時の様子を紹介したものである。この場合、授業の雰囲気や生徒と教師の距離等を表すことを目的に描かれている。

2) 言説を補助することを目的にした説明図

①手順や方法を理解させることを目的にした「図」

この種の「図」は他に比べ、表現や提示において技巧が凝らされていると思われたことから、A-実写・B-並列・C-段階・D-変則・E-強調・F-裁ち方図の6つに分類して、表現形態や提示の仕方を見ていくことにした。

A-実写

用具の名称を示した図と異なり、使用法については手や布や他の用具と一緒に描かれている。たとえば「尺持方の図」[6]⁹⁶では、右手の各指をどのように用いて尺を持てば良いかが示されている。

B-並列

「袖の前後に因って、袖口くけの始終の仕方を異にすること。」⁹⁷という説明を補うために、[8]⁹⁸が提示されている。「始終の仕方」というのは、つまり脇の縫い代を片側に倒すために袖口のくけは初めと終わりの縫い方が異なることを述べているのである。図では「正しき仕方」と「誤りたる仕方」とを列記して、誤りがちな箇所を正確な縫い方を示している。[9]⁹⁹は、大部と部分で描いた図を併記することで、留意点を強調している。[10]¹⁰⁰は、種類の異なる2種類の留めを併記することで、各々の特徴を際立たせて理解を促そうとの配慮が読み取れる。[11]¹⁰¹は、筒袖の表と裏の両方を示すことによって、袖下の縫い代は切り落とさずに折り込むことが理解できる。運針方法は、針および布の持ち方が留意点であるため、「手前より見たる図」では、親指が針のおよそどの位置を押さえるかがポイントとなっている。「手向より見たる図」では、中指にはめた指貫の溝に針を当て親指と人差し指の2本の指で布と針をつまんで縫い進めることが理解できる[12]¹⁰²。

「並列」においては、「正・誤」、「前・後」、「表・裏」、「大部・部分」と対立する視点で描いたり、似ていて紛らわしい技術等を併記することで違いを浮き立たせ、「図」の有用性を高めたと考えられる。

C-段階

[13]¹⁰³は、布を筒状に縫う場合の手順を示した段階図である。折り畳んだ布の一方を「わ」に描いたことと、表に返した最終段階の図を示していることが特長である。折りおよび縫合が立体的に描かれたことによって、実物との対照が容易になったことが考えられる。曲線で質感を表現することも、図にリアリティーを吹き込む技巧である。[14]¹⁰⁴は袖の丸みの縫い方を示すものである。袖の丸みは、平面構成の着物において特に難しい技術が必要とされる部分で、裁ち落とさずに縫い縮めることによって縫い代を落ち着かせる要点になっている。この点を図象化し、技術上の勘所を押さえた図であるといえる。糸の結び方の図として、玉結び（止め結び）・機結び・こま結び等が示されているが、[15]¹⁰⁵は機結びを示した例で、二本の糸が白・黒で区別され、左右の端がイ・ロ・ハで示されている。部分縫いの段階図を描く際、布の表と裏の区別が必要になる場合がある。[16]¹⁰⁶がその例である。「ウラ」・「オモテ」と記入することでカバーしている。[17]¹⁰⁷は畳み方の手順を示した段階図である。二段階の図によって理解するには無理があり、第一と第二の間に

その過程を示した図が必要であると考えられるが、技術上あるいは紙幅の都合から省かれたのであろう。畳み終えた図が示された例も見られる。ここにおいて畳み方は、説明文で理解することになる。表1には入っていないが、「袖縫上りの図」、「身頃縫上りの図」、「全部縫上りの図」が上から下へ縦一列に並べられている図がある²⁶⁾。これらの図はいずれも各部の完成図である。また、「袖縫上りの図」、「身頃縫上りの図」は裏から見た図であり、特に縫い代の始末が理解できる。これらの図は部分縫いの細かい技術を説明する図ではないが、襦袢では袖、身頃の各部を順に完成させて最後にこれらを縫合して全体を完成させることを説明した図である。

「段階」は、一連の製作過程のうちある範囲を対象としてそれを技術の要素で分節して形相化したものである。したがって特定の段階が画像として図示されることになるのであるが、前の段階と次の段階は継続性のあるひと続きの図として描かれなくてはならない。その結果、技術や作業の過程が必然性をともなったものとして提示されることになる。

D-変則

しつけや隠ししつけでは、第一段階で二枚の布を縫合した後、第二段階でしつけ縫いをする。この二段階過程を一枚の図で描くために、[18]²⁶⁾では端の一部を削除して隠れてしまった第一段階の縫い目を明らかにしている。終了図で示した場合、三つ折りぐけや本ぐけのように糸が布に隠れてしまうものは、[19]²⁶⁾や[20]²⁶⁾のように糸をゆるめた状態に描いている。これは布と糸の力の釣り合いを無視したものであるが、織り糸の間の縫い糸のくぐらせ方を理解させることを主目的にしたために、このような描き方になったと思われる。

「変則」では、図の説明をよりわかりやすく効率的に示すために、隠れた部分や細部が変形して描かれている。

E-強調

「実写」では意図するところが伝わりにくいところを強調して描き、図の有効性を高めているのが[21]²⁶⁾や[22]²⁶⁾の例である。

F-裁ち方図

「裁ち方図」は、裁ち切り線および各部の配置と名称が記入された平面状の図である。[24]²⁶⁾のように各部の名称が逆に向いているのは、被服構成上、左右および前後を構成する布片であることを伝える。

②形や名を理解させることを目的にした図

用具の名称は実物によって確認されなければ知識としての意味をなさないものであるが、「図」は実物に替わるものとして機能したものと考えられる。無記名の種々の用具が無造作に並べられたもの、用具の横にその名称が付記されたもの、[26]²⁶⁾のようにほぼ実物大のものなど、いずれもリアルに描かれているのが特長である。[27]²⁶⁾の出来上がり図は、前後から描いた図に各部の名称が書き込まれている。この前後から描かれた図は出来上がり図として学習目標をイメージさせる機能も有していたと考えられる。

3) 図案

図案の表示上の特長をG-集合として述べる。

G-集合

[28]²⁶⁾は雑巾の刺し方図である。[29]²⁶⁾は背縫紋の図である。多様な種類の図案が示されている。

雑巾は運針練習の応用として取り上げられた教材である。雑巾刺しは美の観念や精密の習慣を身につけさせることもねらいとされ、刺し方には「千の字」・「板くづし」・「花さし」などの名称をもつ刺し方も選ばれている。いずれも細かい縫い目による文様である。「縫い」には縫い合わせの意味と、補強・補修する意味がある。特に明治期になって欧米刺繍が導入されるまでは、「刺し」において後者の意味が担われて、

例えば労働着は生地強化や保温性の向上、あるいは装飾性を求めて「刺し子」を施した。「雑巾刺し方」には「運針」の応用としての縫いの意味と、布を補強する意味での刺しを練習する意味の両方が含まれていたと考えられる。「雑巾刺し方」図が掲載される場合、複数の図案が紹介され、多いものは数頁にわたるほどである。背縫紋は幼児の一つ身の着物の背の上部中央に、加護を意味した紋として縫いつけられたもので、襟肩から3センチほど下に糸で飾り縫いをしたものである。また一つ身の紐つけの飾りにも用いられた。教授書類においては、上記の内容は記されてはおらず、図案のみが示されている。

5 「図」に求められた要件

用いられた「図」が教育内容に整合したものであったかどうかを検討することは、その価値を見極める上で重要であると考えられる。そこで、「図」の教育的整合性を満たす要件とはどのような内容であるかについて考えておきたい。

まず「図」が用いられた目的から考えるなら、対象とする事物を客体化していることが必要であろう。その視点がなければ教育的意図は描き出せないと考えられる。また、標準として機能することが求められたと考えられるが、そのためには模範的な形相を規定する「図」であることが必要であろう。どのような内容が「図」として提示されるべきかとなると、教育内容を細分化・具象化しているもので、客観的な正確さを備えていることが必要であろう。そのうち、挿画においては伝えるべき内容が象徴的あるいは写實的に表現されていることが必要であろう。説明図においては、教授・学習要素を分節して、技術の仕組みが内在されていることが必要であると考えられる。

6 おわりに

明治期に発行された裁縫教授書類において用いられていた「図」は、目的や表現形態によって様々なバリエーションを表していることが確かめられた。本稿では、「図」を挿画・説明図・図案の3種類に分類して「図」が用いられた目的について検討した。その結果、「図」は媒体として伝達すべき内容を提供したり、対象を直接的に映し出す役割を担っていたと考えられた。媒体として機能したと思われる「図」は、言説を補う意味において、あるいは代替になるものとして伝える意味を総括的にしかも端的に表していると考えた。

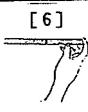
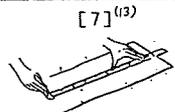
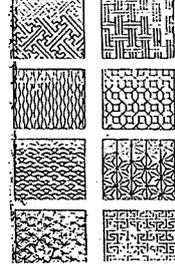
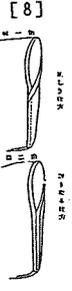
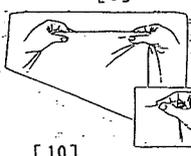
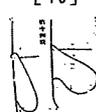
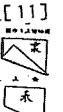
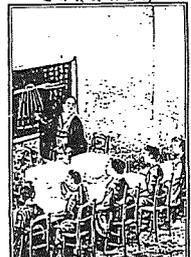
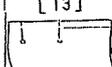
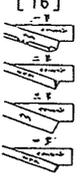
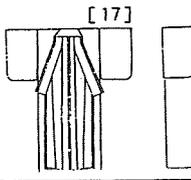
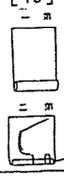
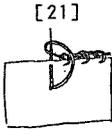
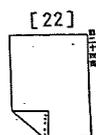
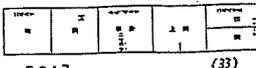
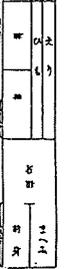
「図」の表現形態は、用途・目的・内容等の多様性が生み出したものと考えられるが、何よりも教授に及ぼす「図」の有効性が認識されていたということではないだろうか。その認識が技巧上の工夫を生み出し、それが教授・学習を効率的・合理的に進める力になったものと考えられる。

引用文献

- 1) 北海道教育会編纂, 裁縫教授書, 富山房, 4 (1900)
- 2) 池田孝, 小学裁縫図解, 一, 博文堂, (1883)
- 3) 榎村たか, 生徒用裁縫書, 山堂, (1890)
- 4) 前掲3), 5・6
- 5) 池田孝, 小学裁縫図解, 四, 博文堂, (1883)
- 6) 池田孝, 小学裁縫図解, 六, 博文堂, (1883)
- 7) 玉木一, 小学裁縫書, 教育書房, 7 (1883)

- 8) 前掲7), 13
- 9) 前掲7), 17
- 10) 前掲7), 19
- 11) 前掲7), 19
- 12) 西島富寿・吉村千鶴, 尋常小学裁縫教授教程 教員用全, 光融館, 8 (1902)
- 13) 戸澤可寿子, 小学裁縫教科書 女児用, 金港堂, 10 (1902)
- 14) 戸澤可寿子, 小学裁縫教科書 教員用, 金港堂, 34 (1902)
- 15) 前掲14), 34
- 16) 前掲1), 13
- 17) 前掲1), 16
- 18) 佐藤小寅, 改訂小学裁縫教授書尋常・高等科用, 松雪堂, 9 (1899)
- 19) 前掲13), 9
- 20) 前掲12), 27
- 21) 大村・波多野・柴田, 高等小学裁縫書 児童用, 普及舎, 12 (1902)
- 22) 大村・波多野・柴田, 尋常小学裁縫書 教員用, 普及舎, 23 (1902)
- 23) 前掲21), 28
- 24) 前掲21), 19
- 25) 前掲18), 7
- 26) 前掲13), 16
- 27) 前掲22), 42
- 28) 前掲13), 18
- 29) 前掲13), 19
- 30) 前掲1), 21
- 31) 波多野美智子・松島華子, 小学裁縫教授書 下, 三穂堂, 81 (1895)
- 32) 前掲14), 40
- 33) 前掲31), 21
- 34) 前掲1), 10
- 35) 前掲7), 3
- 36) 前掲7), 4
- 37) 前掲7), 5

図表1 「図」の分類

挿画	説明図		名称	図案
	手順・方法			
情況設定 [1] 	A 実写 [6]  [7] ⁽¹³⁾ 	[26] 	[28] 	
				B 並列 [8]  [9]  [10]  [11]  [12]  [12] 手前が見えぬ [12] 手向が見えぬ
モノや情況の普及 [2]  [3] 	C 段階 [13]  [14]  [15]  [16]  [17] 			
ありのままの光景 [4]  [5] 	D 変則 [18]  [19]  [20] 			
	E 強調 [21]  [22] 			
	F 裁ち方図 [23] ⁽³¹⁾  [24]  [25] ⁽³³⁾ 